方向　第二四号　一九八三年六月六日発行　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

わたしの兵隊手帳（七）

赤谷明海

〈昭和十九年十一月五日の項のつづき〉

○次に今までの作歌をまとめている。重複するが、今まで気づかなかった説明もあるので、そのまま写し出す。

・しみしみに鳴きゐし蟬の声たえてうのの峠の鶯のなく（船中）

・道の上に続く軍靴の跡すべて南に向くを見つつ我れ来ぬ（一九、七、一四）

・ここに来て三月くらせど庭草の葉末に光る露をまだ見ず（八、二八　湖南の夏）

・赤茶けし道並びゆく患者らの白衣へ病を白と訂正〉に踊る真夏日の照り（八、二八）

・畑中に三つ墓あり真中は小さき塚へ墓を塚と訂正している〉ぞ子の墓ならむ（九、一二、臨城付近）

・児童らの挙措敏捷が病む我をさびしがらせて秋の日くるる（九、二三）

・片岡の蔭敷く稲田刈り終へていま母そばの日向に佇ちぬ（九、二七）（懐母）

・かかる日もなほ閉ざされて古寺の障子に秋の陽は照りをらむ（九、二八　法金剛院）

・掌をやればもろくも落つる頭の毛を敷布の上に置きてみつむる（九、二九）

・かつはほめかつはすかしつ秋の宵（よ）を子に屑もまし母はゐまさむ（一〇、一）
・たしなまむ酒を乏しみ寒々とわが父きみは宵寝しまさむ（一〇、三）
・檐下に垂れし仕事着陽に照りて白く乾ける畑田の泥（一〇、四）
・日暮れていまだかへらぬ人待つと檐下深くこもるぬくとさ（一〇、六）
・檐下に閉てし雨戸に秋の陽のほのぼの照りてくもの這ひ出づ（一〇、六）
・今頃は鎮守の森に椎の実を落すと子等が石投げ居らむ（一〇、七）
・せがまれて話し家（カ）となる父親の酔ひて今宵の機嫌よろしき（一〇、八）
・殆どが首尾を欠きたる本なるに借ると患者ら群がり競ふ（一〇、一二　病院図書室）
・峡空のせばみの果ての杉木立ここより奥は竜神ケ丘（一〇、一〇）
・しづもりや太古のごとし山深くたたなふ水のくろへ※原漢字：黒＋幼＞く凝りたる（一〇、一七）
・峡道のつきし奥処に池ありて隅（隈）なく照れる秋の真昼陽（一〇、二九）
・生きてわれ故国にかへらば何はさて我が家の井戸水飲みてし飽かむ（一〇、二七）
・応量坊庭の薄苔霊光り人気なきまま朝の日は出づ（一〇、二九）

以上旧手帳ヨリ移ス

△思惟は目を瞑（つ）ぶつたり、乃至は一と所を視（み）つめてすべきものではなく、大きく見開いた鋭い眼と油断のない感覚器とでしなければならぬ。――ディツケン「哲学の実果」一九頁

……

宗教←→科学

内（心）――東洋的　　西洋的――外（感官）

ヘディーッゲンなど全く記憶にないが、奉天か遼陽で堀辰雄の『曠野』（ひろの）を読んだことだけは今でも覚えている。王朝時代の姫の屋敷の築垣（ついじ）の描写は奈良高畑の土塀にヒントをえたに違いないと確信していたものである。戦後、著者がそうだと書いていたのを見たので、よく覚えているのかもしれない。〉

〇十一月八日森田曠平兄より法輪寺三重塔雷火にて焼亡の由言ひ来る。これ何時の事か。ただ我が脳裏に浮び来るもの、真夏風なくして昼間めらめらと劫火へごうか〉を挙ぐる状況なり。熱火を映しては月余の干バツに青く萎へな〉へ伏す水田の様を見ずや（一一、八）

・国宝と千年経へへ〉につつ今にしてつひに亡へう〉せにき三井の御へみ〉塔は

・ひときはと三井の山辺の木々ゆすり古き御塔は焼け落ちにけり

・禍へまがつみ〉の鬼らはびこり大和なる飛鳥の塔を焼きて落しぬ

※十月三十日付森田曠平端書（一一、八受）

第二回目の御便り十月二十九日拝見しました。小生一晩泊りで法隆寺へ勉強に行づてゐました。壁画の一部分菩薩の半身を模写しました。大いに感激してゐます。それはさうと法輪寺の三重塔が雷火で灰燼となつたのを知つてゐますか、推古建築の傑作が、何とも云へず残念至極です。大和の秋も深んで高円山も色づきました。先日

招提寺の萩を見ました。生駒の王竜寺へ行つたお話はしましたかね。十輪院へ奈良市〉のかんのんへ観音〉様によく似た円満な御相好へお顔〉でした。楠正成戦死の年に造顕された磨崖仏へまがいぶつ〉です。俗務の間に石仏めぐりをするのは全く楽しいものです。一艸舎の御便りは大塚先生が御手紙をかかれたさうですからそれに詳しいでせうが今は沈滞してゐます。非常時下、人を集めるのはなかなか困難でせう。愈々身辺多忙となつて来ました。大塚先生は先日伺つた時はお元気でした。ただ忙しいのでお困りの様子です。しかしこれは先生に限らず皆の悩みですから仕方ありません。北浦さんは田中嬢（？）の二の舞といふのではありませんが、……三輪へお裁縫をならひに通つてゐるかと思へば、今は堺へ家庭教師に行つてゐるらしい様子です。田中氏には時々道で会ひます。……艸は出口氏の件以後発行してゐません。では又近くお便りを致します。お元気で。

へ北浦さんは育英を辞めたのでしょう。田中氏は千美へちはる〉さん、後の原田夫人です。「出口氏の件」については思い出せず。出口栄吉氏も一艸舎同行で印刷所勤務。〉

※十一月一日付律寺端書（十一日受）

変ツタ事ナシ　へ律寺は八幡の善法律寺。渓義豊（たにぎほう）氏は応召中ですので、老僧西村元照氏からのものでしょう。〉

※十一月二日付山前香観端書（十一日受）

……さて念仏会へ唐招提寺念仏会〉も十九日開白へかいはく・始め〉、二十日結願へけちがん・終り〉、あわただへ※原漢字：心十荒〉しいものでした。参ずるもの、初日に尼、律、伝、孝、融、北中、中山、福永の八輩、

二十日には尼、律逃げて安養院来るのみ、寥々限りなし。去年は東室へひがしむろ〳〵に陣取つて気勢を挙げたけど、今年は陣取る元気もんは無し、淋しいものでした。……執行長猊下へしぎょうちょうげいか〳〵は矢張り野に置け蓮華草で、さて入つてみれば仕方のないことばかりらしいです。一気の改革も難しいし又いろいろの事もあるでせうしネ……

〈文中の「尼」は尼崎大覚寺岡本静心師。「律」は前記律寺の西村師。「伝」は端書の主、奈良伝香寺の山前香観師。「孝」は五条講御堂の森本孝順師。「融」は京都壬生寺松浦融海師。「北中」は奈良念仏寺北中静信師。「中山」は八幡法園寺中山信海師。福永君は説明ずみ。「安養院」は結崎〈ゆうざき〉の寺、住職は益田静範師。執行長北川行戒師が私の入営後死亡し、森本師が代ったばかりという年だったわけ。なお、右に記した人々はいま森本師を除き、すべて故人です。

※十一月三日付福永孝円氏書状（十一日受）

……長老は至極元気、起床は昨今おそくなつて来ましたが、戒学院や経蔵でも独りで趣かんとする位の元気さ、相変らず筆を執つて、日々退窟〈屈〉する事なく暮してゐなさる様子です。殊にあの頑固さは微塵も衰へる処無い状態ですから茲〈ここ〉五年位は大丈夫と安心してゐます……今回大日本仏教会が発展的解消して、仏・神・基〈キリスト教〉合同の大日本戦時宗教報国会が文部省直轄で成立し、その理事に就任され、理事会の為の上京です（孝順師の事）……得度は十月八日了へまして孝円房英海となり、貴兄の弟となりました。貴兄が傍に居て下さつたら小生如何程嬉しかつたでせう……小生の日常生活は全く多忙、昨年とは雲泥の差です。孝順和

尚が前に記した様な事情ですから、どうしても留守役の日が多く、小生には負担が大きすぎる状態です。行戒さんの如く出来ればよいが、小生は世帯のやりくりなんか人一倍下手、自分で耕して自分で賄へまかなゝひの方を心配し、日常の事務を或程度処理して行かんとすれば、小生には身体と時間とに全く余裕が無い状態です。長老と重田へしげたゝの婆さんへ郡山からの通いの炊事婦ゝ相手では淋しい限り、畑作りと掃除、或は種々の雑役に追はれ通しの毎日では、過渡期で止むを得ないとは云へ、相当考へさせられます。二、三年の辛抱と思ひ頑張つてゐますが、当山は総てが瞬間に生きてゐる様な状態で、別に目新しくなつたものもありません。……今日もさつま芋の整理、ゴマの整理、花種の整理、其の他畑物の整理でおばはんと九時迄夜業してゐたので、手紙を認へしたたゝめてゐる間に十時が近づきました。悠々と且つ図図しく日常の鎖へ瑣ゝ事に拘へこだわゝる事なく過したいは願望なれども、留守役の責任上為し得ないのは残念です……~~ここ五年~~

へここ五年位は大丈夫と見られた長老北川智海和上は二十一年の三月亡くなられ、私は死にめに会つてゐません。ゝ

○（八月七日落掌荒川繁雄より）へ八月七日は武昌の病院在。ゝ

……仏教の盛んなること内地同様、実に多くの寺院有り、坊主の格式の高いのに驚かされます。此れ迄へこれほどまでゝ程度を上げたのは只御教へ教義かゝの立派さより何かの政策に依るのではないかとも思はれます。黄衣を着……を見ると……感有ります。先日某寺に御詣りした所、貫主へ首ゝらしきもの出て来たりへてゝ何かわからん事を云つてゐましたが、小生の感じた事を一、二記せば、役僧らしき者が一段下に坐れと云ひ、あぐらをするな、貫主に手を合せ等仲々注文多く辟易へへきえきゝしました。仏尊より人へ僧ゝの方に重点がある

ものの如く、又日本人を大して鄭重に取扱はんへぬ〉所を見ると、相当な見識があるのか、それ共、日本の偉大さを認識せざるか、取敢ずこんなものでした。

〈荒川君は郁文小学校の同窓生、タイ国からの軍事郵便でしょう。此方の住所がよくも判ったものです。以下の数通と共に持ち運び、遼陽で転記したものの、どこで失くしたか復員時には携帯せず。〉

夜来庵かぜだより　―若い日の森田曠平―　（七）

原田憲雄編

〈一九三六（昭和十一）年〉　七月八日　付、九日午後、伏見局消印、はがき。

富田渓仙氏長逝。

訃を知りて慟哭数時。今日に至りて気や、落ちつく。

他に言なし。

夏山の青葉木立に鳴くせみのかなしきかもよ亡き人を思ふ。

八日夜　合掌

八月十日　午後、聖護院局消印、はがき。松ケ崎正田町。

お手紙拝見。

今月中は京都の自宅にゐる。来月は又伏見へ帰る。

忙しいので困る。殆ど暇がない。短歌会は面白いだらう。僕の方も何とか都合をつけるから君の方でその案を見せてくれ。〈森田〉直一君や高田〈益雄〉なんかも会員にしたらい、。

八　月　十　三　日　　午後、聖護院局消印、はがき。

十六日都合わるい。十五日よろし。十七日はおそすぎる。十六日　午前中十二時頃までならかまはん。如何？午前八時頃か九時頃からの方が涼しくてい、かもしれん。十六日は日曜なので直一兄の方も都合がよからう。

（直一君　島津〈製作所〉へつとめてゐる）　ではこれでさよなら

八　月　二　十　一　日　　午前、京都五条局消印、はがき。

二十三日の遠足約束したが　沢田先生個展が迫つてゐるのでとても忙しくて行けぬ。このことへ大塚〈先生まで御伝言ねがひたい。残念ではあるが仕方がない。その点君ら自由でうらやましい。では又。新作あれば送つてほしい。かしこ

九　月　二　日　　午後、聖護院局消印、はがき。墨書。

お手紙拝見、会は六日の夜がい、、昼は当方都合がわるい　七時頃からがい、だらう、

水甕の方は実際自分でい、と思つたのがあまりのらない、君の作では第一首目と最後のが好きだ　ことに一首目はい、　今下痢で休んでゐる、そのうちに又

〈※文面からみて、この前後にはすでに『水甕』に森田君の歌もわたしのも掲載されていたようだ。が、わたしが『水甕』を切り抜いて編んだ『森田曠平歌集』（以下、『森田集』と簡称）は、昭和十一年八月掲載のも

のが最初、『原田憲雄歌集』（以下、『原田集』と簡称）は同年十一月号掲載のものが最初である。従って右の文中の「第一首目と最後」のがどんな歌だったか分らない。『森田集』の八月と九月の分を引いておく。

朧夜に梟しばなくさびしさや木立葉がひに霧流る見ゆ
五月闇蛙なく夜はしくしくに家さかり来しさびしさを思ふ
篁はさやにさやげり嵯峨野路は風ややしげく吹きいでにけり
若葉なす楓林をこゆるなべ古りしみ寺のいらかを見たり
山かひの嵯峨路を行くとゆとりなく櫟若葉の隠沼を見ぬ
うまごやしただ白々と野の涯にけぶりて見ゆる花のかそけさ
峠路越えて来つれば春ぜみのここだも鳴けるこの夕べかも
大淀のひたひた寄する波の秀は月のしたびに輝きにけり
常夜灯にほのぼのあかき杉木立狭霧流るる白ささぶしも

〈以上、八月〉

真清水蔵六氏逝去

みまかりし人を思ひてしみじみと涙落せり陶工われは

富田渓仙氏逝去

万葉春秋画きて終にみまかれる先生を思へば鋭心もなし
夏山の青葉木立に鳴くせみの悲しきかもよ亡き人を思ふ

満谷国四郎氏逝去

つぎつぎに人死にゆけりこれの世の淋しさ吾は思ひけるかも

隠沼の水の豊かさ見るなべにしまし落ちつく心なりけり

緑蔭にまろびて見れば白々と行く雲すがし青空のいろ

旅の歌

大歩危へおほぼけ〳〵の澱みて青き川の淵はるかに見れば流るとも見えず

深谷ゆふりさけ見れば高山の頂近く雲はさわげり

物部川はるかに見ればきはやかに河原は長し人鮎をつる

白々と流れははてぬ大川の日暮れて千鳥鳴けばさぶしき

ねむの木の並木の雨にしみじみと思ひわくなり故郷の山

ねむの花咲きしづもれる山路にひびきてすがし谷川のおと

九　月　五　日　付、午後、聖護院局消印、はがき。差出名は「曠平」だが祖母鹿愛氏の代筆らしい。

拝啓　昨来病気臥床中にて明日出席致兼候間不悪御承知被下度願上候　九月五日

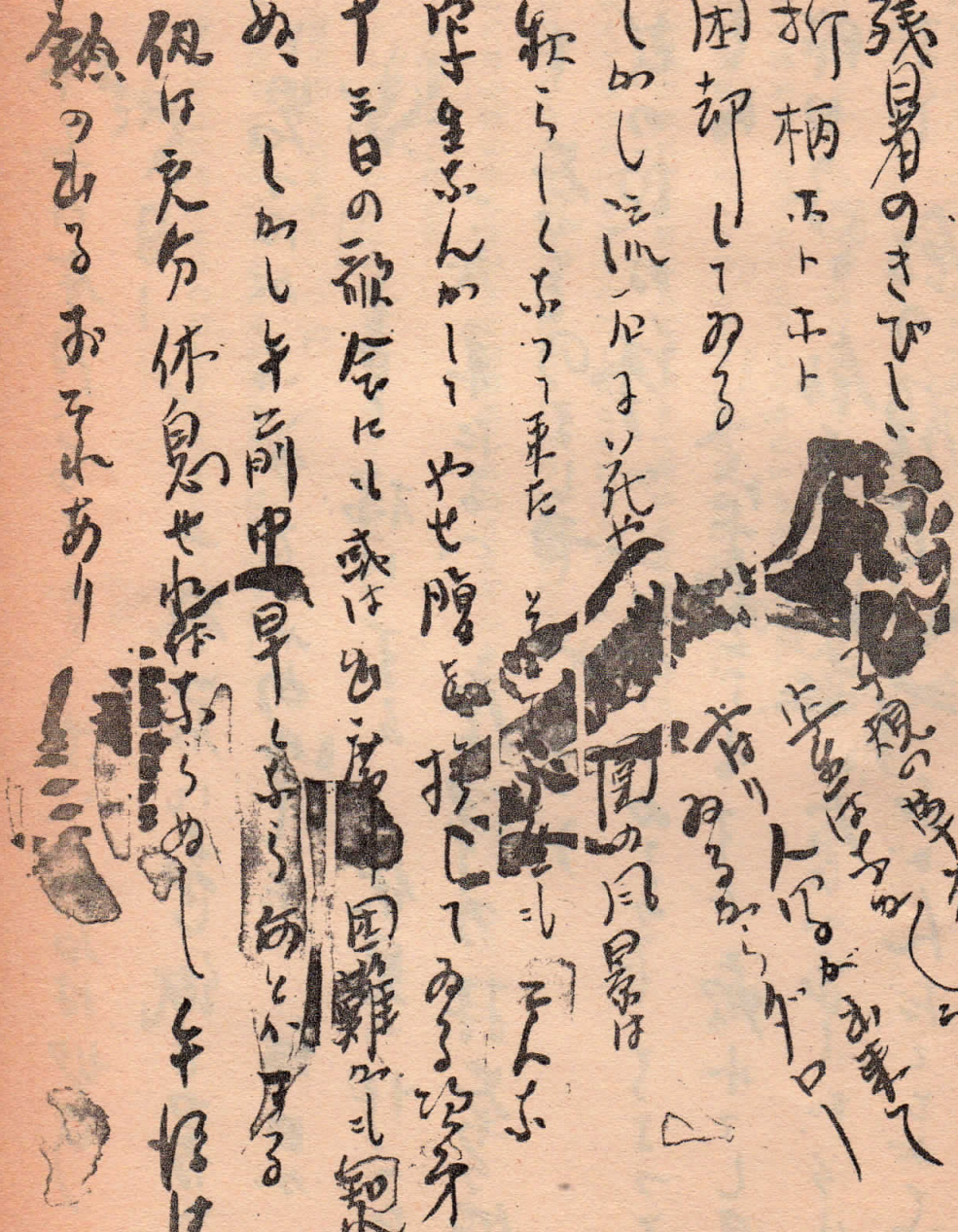
九　月　七　日　午後、聖護院局消印、はがき。

お手紙ありがたう　もうだいぶ快くなつたから安心してくれ給へ　絶食二日　体が疲れてずつと床にあり

水甕のは実際自ら顧みてジクジへ原漢字：心×丑、心十尼〳〵たるものあり、その後　作なし

今後　兄はやめ給へ、君で沢山だ　他人行儀は一切ぬきにしたい　回復したら手紙を書く　不一

九月十一日　付、午後、聖護院局消印、手紙。墨書、彩色画。



僕は今月にはいってから、ふい、君は如何

一枚君に色紙を書かう

と思ったがふいのでやめました　何日か

書く様にする　伏見へ行ったら

一度来たまへ　唐津の松茸盛

で茶をのましやう　やらう

此の頃は体が弱ってゐるので　ちょっと

しん　宇和島でもすぐ病れてしまう

昨日の飯を　食ひました、それ

まで飯の顔を　おがんだことがない

った、もう一週　ぶらぶらしたら回復する

と思ふ　それまで　カイ草氏の字を

一重山霊又一重

祝業成題③

しっかりと

どうぞまた会はう

君も仕事を進めて

しかも

十二年九月十日

曙亭

梅屋洞主人

孔子

残暑のきびしい折柄ホトホト困却してゐる　しかし流石に花や四囲の風景は秋らしくなつて来た　そこで小生も　こんな写生なんかして　やせ腹を撫してゐる次第、　十三日の歌会にも或は出席困難かも知れぬ、しかし午前中早くなら何とかする　夜は充分休息せねばならぬし　午後は熱の出るおそれあり

子規の草花の写生はなかなかうまい　やはり人間が出来てゐるからダロー

作品は今月になつてからない、君は如何　一枚君に色紙を書かうと思つたがないのでやめにした　何日へいつゝか書く様にする　伏見へ行つたら一度来たまへ　唐津の抹茶々盌で　茶をのましてやらう

此の頃は体が弱つてゐるので　ちよつとした写生でもすぐ疲れてしまうへふゝ　昨日から　飯を　食ひ出した、それまで　飯の顔を　おがんだことがなかつた、もう一週間もしたら回復すると思ふ　それまで少し　草花の写生をしておきたい　ではまた会はう　君も作品を送つてくれ　十一年九月十一日　曠平　枯魚洞主人机下

一重山尽又一重　夜来庵題

九　月　十　二　日　午前付、午後、京都局消印、てがみ。墨書。

君よりのハガキ昨夜みた　明晩は行けさうにないから　作品を十五送る　先月もさうだつたが今月は特に悪いその上少しも作らないのだから世話はない　勉強せずにうまくならうといふのが第一間違つてゐるのだが　何しろこちらには本職があるのだから　なかなか精進出来ぬ　何へどゝうか大塚先生の批評よく聞いておいてくれ給へ、もう二三首は十六七日頃までには出来るかも知れぬが実に心もとない　大抵出来ぬだらうそれはさうと君の近頃送つて来る作は実によくなつた　ことに昨日のはい、　君をいだきてひそかにも　より数

段の進歩だ

実際のところ　現在の漢の心境は（君は或は怒るかもしれぬが）歌は門外漢としてやつてゆきたいと思つてゐる平福〈百穂〉氏だつてさうだつたと思うへふ〉、それに白秋のよへや〉うに宣言とか何とか言つて短歌の信念についてえらがつてゐる様な文を読むと嘔吐を感じる、歌人面をして　歌こそ至上のものだと言つてゐる奴が一番きらひだ　これは何についても言へることだと思ふが、第一　白秋の近作は君も言つてゐた様に　なつてゐない牧水の「野原の郭公」へ昭和四年五月初版・改造文庫。森田君のが何版かわからぬが、わたしのは昭和五年九月八日六十版、よく出たものである。若山牧水（一八八五―一九二八）歌誌『創作』の主〉へ絵を書いた　十五程各頁にわたつてかいた　何なら君に進呈してもよい　赤彦の柿蔭集へ挿絵を書かうと思つてゐたので　その試作だ　勿論絵具で

折角精進を祈る　ではすまぬがたのむさよなら　九月十二日午前　曠平　　枯魚洞主人　玉案下

短歌を罵つたが僕は実に歌を愛してゐる、かぎりなく

九　月　十　五　日　　午前、聖護院局消印、はがき。墨書。

早速返送へたぶん、前便同封の歌稿に、歌会での批評を書き入れて返送したのであろう〉ありがたう

もつと書かねばならぬが今日はすこし気分わるく筆がすすまぬこれで失礼

これの世の生計（たつき）思ひて秋萩のさ枝をここに見てゐたるかな（枯野）

伊勢旅行《散文詩》

原田道子

1 浜辺

下をむいて歩いていると、ちっともあきません。海草や、貝などがおちています。くつに入ってくる砂の細やかでしなやかなこととといったらありません。もう、初夏です。さかなの、あたまと、じっぽがきられておちています。どうたいはどこへ行ったのだろう。しっぽは、心配そうに、頭に話しかけます

2 岩場

小さな青白いきれいな貝が、岩のくぼみに、水たまりに、生きています。海へおりようとすると、少しぶきみな貝がならびます。えらそうに、前へすすめッ！ といばっている。大きなのは、隊長でしょうか。水はたいへんきれいです。小さなさかなが、あっちへ行こうよ、いやこっちだ、とさわいでおります。なんて暑くてうるさいのでしょう。だから、岩はじっとだまって、こわばっているのですね。

3 波

今度は大きいぞ、いやつぎのほうが大きい、それみろいまの方が高く上がって、浜辺のかわいた砂をぬらしたよ、いまのがいちばん大きい、ザブン、ジャバンと大きなわらい声をたてている。波は、いつも、浜辺からきこえてくる声をきいています。そうら、いま、大きな波がいくぞうウーとうなります。

（一九八三年五月二十五日）

酔花陰 ―李清照（六）―

原田憲雄

前回の「一剪梅」を贈ったのち、また旅中の夫に書き送ったといわれる「酔花陰」をとりあげる。

薄い霧　濃い雲　かなしい日永／瑞竜脳の煙は金獣の香炉に消えて…／また重陽の節句だけれど／玉の枕　紗のカーテン／夜半　涼しさが身に沁みてくる

東のまがきに　酒くめば　たそがれて／暗い香りが　袖にいっぱい／さびしくないなど言わないで／簾うごかす秋風に／黄いろい菊より痩せたわたしを

双調、五十二字、前後段おのおの五句、各段、三カ所に仄韻の文字をふむ。まず前段。

薄霧濃雲愁永昼。

うすい霧がかかったり、濃い雲がたちこめたりして、朝から夕方までの長い一日中、こころがものうくとざされている。謝朓に「薄霧のように空濛で、ほこりのように散漫」の句がある。そんな空しく、もやもやと散漫な

憂愁である。「薄霧」といえば、詞人の教科書のようなアンソロジー『花間集』に十世紀のひと牛希済の作に、

秋暮れて／たたなはる関山の岐れ路／いななく馬に鞭あてていづくにかゆく／暁の小鳥なき霜樹々に満つ／／禁城の楽の音に夢たえて／枕にそそぐ涙はてなし／一点のくれなゐと薄き霧／たをやめは愁ひ語らず

とうたうその「薄き霧」を極めて自然に想いおこす。牛の作は「謁金門」で調子は違うが、前段は女を都にのこして遠く旅する男を、後段はのこされた女をうたう。その女のかなしみを、李清照が「醉花陰」の前後段に拡充しているのではなかろうか。「雲」を「陰」とし「雰」とする本がある。

瑞脳銷金獣。

「瑞竜脳」とよばれる名香をたいた獣形の金属の香炉も、いつか煙が絶えていた。

瑞竜脳とは、ボルネオ、マレイ、スマトラに生育する竜脳樹の樹心からまれに採れる結晶性粒状の竜脳香のこと純度の極めて高いカンフルで、中国では「瑞竜脳」と称した。九世紀の段成式の『酉陽雑俎』巻一に次の話を記す。

天宝（七四二―七五五）の末年、交趾（いまのベトナム）から竜脳を献じた。蚕の形でセミの羽のようにすきとおっていた。ペルシャ人が鑑定していう。竜脳樹の老木から採れたもの、めったに手に入らぬものです。宮中で瑞竜脳（めでたい竜脳）と呼んだ。天子（玄宗）は楊貴妃にだけ十枚与えた。香気は十歩以上向うにまでしみとおった。ある夏の日、天子は親王（一説には寧王）と碁をうった。賀懐智が琵琶を独奏し、貴妃が観戦していた。天子が数目負けそうになった。貴妃は抱いていた犬をそっと放した。犬は盤上にかけ上って石をかきまぜた。天

子は大よろこびした。そのとき風が貴妃の領布（ひれ）を吹き上げ賀懐智の頭巾にからみつかせた。賀は帰宅しても満身に非常な香気を覚えたので、頭巾を錦の袋におさめ秘蔵した。安氏の乱後、都に還った上皇（玄宗）は途中で死なせた貴妃がしのばれてならなかった。賀懐智がさきの頭巾を献じ、事情を説明すると、上皇は錦の袋をひらき、涙を流して「これは瑞竜脳の香りだ」といった。

詞の炉中の香が事実としてそれであったかどうかはともかく、「瑞脳」の文字を使うことで、玄宗と貴妃とのような愛情が前提とされている。これが詞のレトリックの公式。その香が消えて、といえば、男の愛のさめたことを暗示する。

佳節又重陽、玉枕紗厨、半夜涼初透。

九月九日（陰暦）は重陽の節句。この日、十七歳の少年王維が「独り異郷に在って異客となり、毎（いつ）も佳節に逢へば倍して親を思ふ」とうたったことは、誰知らぬ人もない。詞中の女も去年は髪にグミの枝をさし、男とピクニックして塔に上ったのであろう。その節句がまたやって来たのに、男はいない。「又」の一字に女の吐息が感ぜられるではないか。ひとりこもって、夜になってもひとり床に伏すばかり。「玉枕」は枕の美称。王維ついでにいえば、「孫秀才を送る」詩に「玉の枕、対の花模様のベッド」の句がある。前引牛希済の詞は、李賀の「美人梳頭歌」を本歌とし、その賀の「許公子鄭姫歌」に「夜光る玉の枕に鳳凰すみて」の句がある。共に清照の記憶のカードボックスからいつでも取り出せるものだったろう。「紗厨」はベッドの薄絹のカーテン、碧紗厨ともいうのは、その色のものが多いからである。カーテンの中で、枕にこうべを押しあてたまま、眠れぬ夜

の時間がのろのろと過ぎてゆき、いつか夜半となって、すると涼しさが、冷たさというべき涼しさが身に徹りはじめる。

どのことばにも先行する詩人のすぐれた句を典拠に備えているが、彼女にとっては当然のこと、典拠を忘れていま水からすくい上げたばかりのことばと感じさせる方に、むしろその功があるのだから、特に必要なもの以外は説明をはぶく。昼・獣・透が前段の韻字。さて、後段。

東籬把酒黄昏後。

東のまがきのもとで、といえば、菊を愛し酒を好んだ隠者陶淵明、となる。だが、ここに歌われるのは哲人の悟境ではない。そのことは、つづく「黄昏」の語が暗示する。この語は屈原の「離騒」に「たそがれに会はんときみの誓ひしに、あはれなかばに道をたがへぬ」といい、「九章・抽思」にも似た句があって、あいびきの約束の時間をさし、違約した相手をうらむ意を含む。この意は、第二句に、くっきりと形をとる。

有暗香盈袖。

「暗香浮動月黄昏」は有名で、秀吟にはちがいないが、男の隠者林逋の風流にすぎぬ。ほのかなる香りただよふ月のたそがれ、と訳しえて、訳文のあらわすほどのおだやかな感情が生んだ句である。花は梅であった。清照のは菊、暗い香り、とどうしてもいわねばならぬ、清くはあるが悲しみにみちたきつい香りである。「だんだんと暮れてきて、ひっそりと人も静まる」夜、池に身を投じた、「古詩・焦仲卿が妻の為の詩」（拙著『歴代名詩集』参照）のヒロインのつきつめた思いが放つ香気である。香気はこぼれおちそうに、袖にふくれている。金獣の炉

中の香、男が女に与えたそれが消えたことと鋭く対立している。

莫道不消魂、簾捲西風、人似黄花瘦。

長安の都の東に「銷魂橋」とよばれる橋があった。都を去る人を送ってここで別れる習わしだった、と玄宗の代の逸話を集めた『天宝遺事』に記す。男は、女のことなど忘れてしまってのんびり暮し、たまに思い出しても「なあに、あいつも適当にやってるだろう」などといってるのかもしれないが、わたしが魂消える思いでいないとはいわないで。秋風が簾を動かすたびに、もしやあの人が来たのではと、はかない胸をときめかせているのに。夕闇にかぼそく揺れる黄菊より痩せてしまったわたしだのに・・・

前段の「銷金獣」の銷を消とし噴とする本がある。銷・消は音義同じでどちらでもよいが、噴字の不可は拙解で明らかだろう。他にも文字の異同はあるが、これまた省略する。後段の韻字は、後・袖・瘦。

さて、伝えによると、この詞を受けとった夫の明誠は、そのうまさに感心し、これよりいい詞を作ってやろうと思い、来客をことわり、寝食を忘れ、三日ののち五十首作り、清照の作を中にまぜ友人の陸徳夫に見せた。徳夫、再三手にとってみていった。この中では三句がすばらしくいい。明誠がきくと、「莫道不消魂、簾捲西風、人似黄花瘦。」であった。という。面白い話で、およそ趙・李夫妻を説く者でこれに触れぬものはない。だが、伝えの出処が偽書らしいから、信じるわけにはゆかぬ。ただ、こんな話を作らせ、よろこんで人にもてはやさせるほど、この詞が、女心の微妙をうたい得たのだ、とはいってもよい。

わたしは、さきに説明したように、これは牛氏の詞から点化作為したものと考える。しかし、いまの中国の学

者が好んでするように作者の実際と結びつけて考えるとすれば、旧法党人として追放された父李格非に連坐し、夫から引き離された清照が、さらに趙家から離縁されようとして、しかも夫の意向の定かでないとき、彼女が夫の心をつなぎとめようとして作った、というような仮設を提出しうるかもしれぬ。

このような仮設は、中国のみならず、どこの学者の眉をもひそめさせるものに違いない。学問は実証を重んずるからである。わたしもそれは尊重する。けれども、実証をきびしくいう人が確からしくいう説も、検討すると、案外簡単な文献に依りかかっただけのものも少くはない。今日、目の前に起こった事件の裁判にさえも、長い時間をかけての決定が、もろくもくつがえる例をしばしば見る立場からすれば、そう易々ときめつけないでほしいと言いたくもあり、また可能性をひろくさぐる道すじとして、思い切った仮設をさまざまに出して、多くの人の検討にゆだねてもよいではないか、とつぶやきたくもなる。つまらぬ横道にそれた。もとにかえろう。

疑わしいにしろ、あの逸話により、その三句によって、この詞は清照の代表作の一つとなり、宋の詞を代表する一つとなった。

「永昼」「金獣」「盈袖」の三つは、清照の造語ではないか、という気がする。確かめる作業をするいとまはわたしにはもうない。篤厚の学者におまかせしたい。

一九八三年六月六日

※本誌第二〇号の拙稿「中興頌」の誤りを、上原淳道氏が四月二十三日付のはがきで、教えてくださった。わたしが気づいた第二〇号「如夢令」の誤りとともに左に訂正する。

第二〇号、一六頁、一〇行　泪・溺→沮・溺

第二二号、一七頁、五行と一八頁、五行　史子明→史思明

同、二〇頁、二行　草の生えてみるがいい→草の生えているのをみるがいい

同、同頁、六行　琥秦→虢秦

同、二二頁、三行　兵子→兵士

このような教示はうれしく有難い。粗漏なわたしは外にも誤りが多かろうと思います、大となく小となく、ご教示くださるようお願いいたします。

花　蘇　芳

もともと、人さまとのおつき合いは広くない方だが、勤めをやめるまえからだんだんに狭ばめ、勤めをやめて更にせばめた。そういう鬱陶しい人間をも嫌わずに訪ねる幾人かの方がおられる。方々は、ふしぎにみな「歌仙」を巻く趣味をもたれ、わたしにも加われと勧められる。無粋不才を自覚するので、にべもなくお断りした。方々はそれでも、巻いた歌仙をもってきて見せて下さる。

去る四月八日、いちにちぼんやり庭にむかっていたら、日のかげるころ、ふっと、

花蘇芳ながめつくして夕べかな

という、やくたいもない句がとび出した。若いころそそのかされて一寸まねしたこともあるが、四十年も昔のこ

と、なさでものことをと思いながら、なつかしくもあって家人にみせたら、

白き壺にれんぎょうの花溢れたり　　慶

とまねをした。次の九日、「土くろしはこべらの種ふくらみて」を示し「あなたは？」ときく。「いや、あれでしまいだ」と答えると、うれしがって子供に示し「お父さんに勝った」といっている。すると、子供は、

あぜ道はれんげの花のもうせんよ　　道子

とノートに書いて、「お父さんやお母さんに負けないぞ」ということらしい。一家の主たるもの、フンキせざるをえぬ。十日、「雨降ってやすらい祭みにゆかず」、十二日、二人を伴ない今宮神社で「祭すぎて花散るのみの社かな」、舟岡山で「さくら散る参道を子ら走りけり」慶。十四日「ちりとりにあをきの花や散りこみぬ」慶。十五日「都忘れわが狭庭にもありにけり」「われの知らぬ草の名を知る道子かな」。十七日「おにたびらこ春はおにさへしおらしく」慶。「おに」というのはわたしのことらしい。十八日「風邪にふすわれを気づかう娘かな」慶。十九日「春雨に子を待ちわびし紅茶かな」慶。

たいくつな春雨のふる昼さがり　　道子

二十一日、

あじさいの葉にたまりつつ雨のつぶ　　道子

二十二日「教員をやめたる妻と春ひなた」「われもかつて教員なりき春ひなた」憲。「れんげつつじ一枝生きて花咲けり」「なめくじのはい出でたるを掃きもどす」慶。「なめくじ」はわたしのことなのかもしれぬ。（憲雄）